

第51回日本免疫学会学術集会・若手フォーラム報告書

- 日時：2022年12月8日（木）20:15~21:15
- 進行：鈴木 忍（京都大学）、田中 ゆり子（東邦大学）
- アシスト：安藤 眞（慶応義塾大学）、角南 理己（京都大学）、安田 圭子（京都大学）
- 参加者：約 120 名

- 実施内容
- 登壇者（50音順）

- 伊藤美菜子（九州大学）
- 合田 昌史（小野薬品工業株式会社）
- 佐藤 尚子（理化学研究所）
- 七野 成之（東京理科大学）
- 鍋倉 宰（筑波大学）
- 西井 慧美（順天堂大学）
- 三宅 健介（東京医科歯科大学）
- 村上 龍一（東京大学 薬学系研究科）
- 山崎 聡（筑波大学）



本フォーラムの開催に先立ち、本学術集会で演題登録を行った学会員を中心に、研究者のキャリアに関するアンケートを依頼し、128名から回答を得た。その回答をベースに、1) 将来に対する不安について、2) 免疫学の未来について、の2つのトピックについて取り上げた。

1) 将来に対する不安について

大きく研究者としての資質、雇用の安定性（ポジションの確保やプロモーション）、キャリアパス、ワークライフバランス、ラボ運営を含めた研究活動の継続、研究の将来性についてが、研究者の方々から不安として挙げられた項目であった。これらを踏まえて、登壇の先生方にこうした不安についてどのように対峙してこられているのかを伺った。また、キャリアの一つの選択肢として企業を選んだ方々19名からの聞き取り調査の結果を共有した。

2) 免疫学の未来について

免疫学のあるべき未来についての意見を取り上げた。また、さらにそのために学会が出来ること、学会に期待することについてもアンケート結果から得られた意見を集約して共有した。異分野交流の必要性、学生の教育の場の提供、若手研究者の発掘・育成機会の創成の三つが主な声として挙げられた。

- 本フォーラムで出た意見のまとめ：

- 将来についての不安は大半の参加者に共通して少なからずあり、特に職の安定性についての不安が見られた。（将来に対する不安がとてもある:26%、ある:54%）

- 免疫学に進んだきっかけの過半数は興味があったから(65%)であり、そのほかにも重要だとおもったから(22%)、将来性があると思ったから(12%)などの意見もあった(複数回答可)。
- 免疫学のフィールドを盛り上げていくには、インパクトのある仕事を出し続ける(63%)という意見が最も多く、研究費獲得やポストの安定化(58%)も過半数の支持を得た(複数回答可)。
- 登壇者からは、インパクトのある仕事を続けることが臨床の現場や一般にも免疫学の重要性を実感してもらうことにつながり、結果として興味のある優秀な若手人材のリクルートに繋がるという意見があがった。
- 登壇者の一致した意見は、好きなことを続けたいという気持ちを持ち続けることが大事ということ、それがコアにあればあとのことは大抵なんとかなるので不安になりすぎないこと。
- アカデミアと企業、それぞれに良さがあり、各々が好きなことを続けられる環境を自由に選ぶべきである。
- 大抵のことはなんとかなる、という心構えは大事ではあるけれども、困難を乗り越えられるような体制づくりも大事(育児で100%研究に時間を割けない時期があっても細々と継続できるような周囲の理解や環境づくりなど)
- 留学はチャンスがあるならば絶対に行くべき。(困難を乗り越える成功体験を得るためにも)
- 若手同士の交流や悩みを共有できる場を今後も継続して設けることも大切。

- 参加者の声：

- 座右の銘を通して登壇者の人生観や本音を聞くことができ大変貴重な機会であった。
- なんとかなるという positive thinking の姿勢をもって自分の好きなことを続けることが、研究者個人の幸せに繋がるというメッセージを、若手(特に学生)に積極的に発信する機会が今後も必要
- なんとかなる、というよりはなるようにしかならない、過度に期待しすぎないこと。
- 企業との架け橋になる部門(学会開催時にある企業ブースのようなものでもよい)を設けて、アカデミアから企業に進んだ人の話をもっと詳しく個人的に聞ける機会がほしい。
- 登壇者と個別に話したり質問したりできる時間が欲しかった。
- 若手フォーラムにもっと大学院生を参加させるために、宣伝の仕方を見直す(例えばプログラム配布時に広告を挟んでもらうなどして、具体的にどのような目的の会でどんな話が聞けるかを宣伝)

- 総括

このたびのような企画については、継続的に実施してほしいという声を多数いただいた。もし、継続的な開催が可能であれば毎回テーマを定めてもっと深い議論や提案が行えるのではないかと感じた。今後どのように活動を継続していくかについては学会でも是非検討いただきたい。

企画・実行メンバー (50音順)

安藤 眞(慶応義塾大学)

鈴木 忍(京都大学)

角南 理己(京都大学)

田中 ゆり子(東邦大学)

安田 圭子(京都大学)

- 主催者から一言

これまで若手を取り巻く様々な問題を議論する場は、分子生物学会や生化学会では定期的で開催されてきましたが免疫学会では私が記憶する限り初めてと思います。しかし鈴木先生はじめ実行メンバーや登壇者の皆さんのおかげで有意義な会になったと思います。この場を借りて深く御礼申し上げます。開催時間が深夜となったこと、時間が短かったことなど開催する側の反省材料も浮かび上がりました。いつかまた若手企画が開催されることがあれば活かしていただければと思います。

第 51 回日本免疫学会学術集会大会長 吉村昭彦